第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

クマタカ

Nisaetus nipalensis orientalis (Temminck & Schlegel, 1844)

井上剛彦（クマタカ生態研究グループ）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　鳥類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：井上剛彦，2026．クマタカ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 284-290.

Citation: Inoue, T., 2026. *Nisaetus nipalensis orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844). *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 284-290.

タカ目 Accipitriformes　タカ科 Accipitridae

クマタカ

***Nisaetus nipalensis orientalis* (Temminck & Schlegel, 1844)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　C2a(i)				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　EN	基準 D:　－	基準 E:　－

C．個体群の成熟個体数が 2,500 未満であると推定される。

【推定根拠】

2004 年に公表された希少猛禽類調査により確認された生息ペア数から、1,802 羽の生息は確実であり、生息確認メッシュ数（5 km×5 km、2,420 メッシュ）を考慮すると、さらに多いと推測される一方、その後の調査では全国の繁殖成功率の低下が顕著であるため。

加えて、以下の 2. かつ a (i) に該当する事由がある。

2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。

【判断理由】

鈴鹿山脈における 1983 年から 2022 年までの 40 年間の記録では、繁殖成功率等に顕著な減少は見られないものの、原因不明のまま産卵しない例や育雛中止の例が見られる。またペアの個体の組み合わせの交代を 2 箇所で追跡したところ、数多くの交代が確認された。2-6 年で交代した例が多く、わずか 7 ヶ月、9 ヶ月間の短期間で成鳥が交代した例も複数例見られた。中には 19 年間以上も同じ個体同士がペア形成していた例も見られたが、確認されているクマタカの野外寿命(30-34 歳以上)を考慮すると、これらからペア形成している成鳥の自然死亡率がかなり高いことが示唆される。また、一腹一卵の繁殖形態に加えて鳥インフルエンザに罹患した個体や中毒レベルの血中鉛濃度が検出された個体が見られることなどから、目に見える形での減少は報告されていないものの個体数が潜在的に継続して減少しているリスクを抱えていることが推察される。

a) 個体群構造が次に該当

i) 250 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。

【判断理由】

クマタカの個体群については調査されていないため不明であるが、鈴鹿山脈において 35 年以上継続されている分散調査で、個体識別した個体のうち分散した 4 事例全てが同じ鈴鹿山脈内で定着繁殖しており、イヌワシのように広範囲に分散移動していないことが判明している。この事例からこの地域に生息する個体群を下位個体群とみなした場合、2016-2018 年の調査で標高 300 m 以上の鈴鹿山脈全域に 45 ペアが生息しており、個体群の個体数は 100 個体程度と考えられ、基準の 250 個体よりも少ない。また、他の山脈や地域ではまとまったデータがないために比較、評価ができないものの、全国で確認されている個体数 2,000 個体程度から考えると現時点では各地の山塊などまとまった生息地域においても成熟個体が 250 個体を超える地域は存在する可能性は低いと考えられる。

評価分科会：　鳥類分科会

概要

森林性の大型猛禽類であるクマタカは日本の環境に適応して生息しており、分布域は広い。また近年は日本以外での生息繁殖の情報があり、正確な分布の確認が必要である。人間の生活圏に比較的近い場所に生息しているため、伐採による巣の消失や事故による死亡例がある。また、植生の変化による営巣環境の悪化が見られるとともに、繁殖成功率の低下が顕著な地域もあり、将来的に個体数の急激な減少が危惧される。

基礎情報

【形態】

クマタカは、成鳥で体長がオス(n=18)70-77 cm、メス(n=21)74-80 cm、体重はオス 1.5-2.7 kg、メス 2.5-3.9 kg ほどの大型猛禽類である。尾羽が長く、翼の幅が広い。性的二型性を示し、メスはオスよりも大型である。成鳥は背面が濃褐色、下面が白く、喉から胸に黒褐色の縦斑が見られる。顔は黒く、翼と尾の下面には黒帯模様が目立つ。ふ蹠部にも羽毛が密生し、後頭部には短い冠羽が認められる。虹彩色は幼鳥時の灰青色から若い個体時には灰色から黄色、成熟個体はオレンジから赤色へと加齢とともに変化する。

【生活史】

留鳥であり、通常は単独で行動している。繁殖前期の 12 月頃からペアでの飛翔などが見られ、1-2 月に入ると、ペア間での鳴き交わしやディスプレイ飛行、交尾や造巣行動などが活発化する。この頃、目立つ枝先に誇示するように長時間止まるディスプレイが見られることがある。産卵は地域により多少のずれがあるが、普通、3 月から 4 月に 1 卵を産卵する。4 月中旬から 5 月頃に孵化し、雛は 7-8 月に巣立つ。巣立ち後は 1 年半ほど親の縄張り内に留まることが知られている。この間の餌供給の多くはオスが担っていることが判ってきている。年間を通して狩りを含め、森林内で過ごす時間が長いため生態の不明な点がいまだに多い。

【生息環境】

九州以北、本州では標高 300-1,000 m くらいの発達した森林内に生息している。縄張り面積はおおよそ 13-25 km²で 20 km²前後が多い。イヌワシに比べて人間の生活圏に近い場所に生息しているため、生息地内に鉄塔や植林など人工物が見られる場合が多い。食餌は小型から中型の鳥や哺乳類をかなり幅広く利用しており、ヤマドリ、アオバト、カケス、イカルなどの鳥類、タヌキ、アナグマ、ニホンザルなどの幼獣、ムササビ、リス、モグラ類などの哺乳類やヘビ類が確認されている。巣は急斜面の大径木の枝や幹に架けることが多く、主にモミ、マツ、スギなどの針葉樹に枝を積み上げて作るが、広葉樹も利用する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

クマタカ属で唯一、温帯地域にも分布しており、種として、インド、ネパール、インドシナ半島、台湾、中国東南部、ロシア極東南部および日本に分布するとされている。本亜種は日本と朝鮮半島に分布するとされているが、朝鮮半島における確実な記録は数例だけしか知られていない。種クマタカの中で最も北に分布する大型の亜種である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1980 年代以降、分布が明らかになり、九州から北海道までの低山から亜高山地に至るまで、広く生息繁殖している。島嶼では五島列島や佐渡島で目視された記録がある。渡りは行わないが、若い個体が分散時に生息地以外で観察される場合がある。分散先は一部地域において判明されつつあり、大きな移動は行わない例が複数確認されている。2000 年代に入り、極東ロシア地域で生息繁殖していることが確認されたが、本亜種であるとの確認は未確定である。

【生息地の現況】

生息域が広いため、九州の常緑広葉樹二次林、本州の夏緑広葉樹林とスギヒノキ植林、東北のブナ自然林など様々なタイプの植生に対応して生息している。しかしながらヒトの生活圏に比較的近い場所にあるため人工物である高圧鉄塔や建物などが見られ生息圏内での環境が改変される例が多い。また近年では生息地内での風力発電設備の設置や計画が多く見られる。

【個体数の現況】

現地調査、既存資料調査およびアンケート調査により、全国で繁殖箇所が 901 ヶ所確認されており、1,802 羽の生息は確実で、生息確認メッシュ数（5 km×5 km、2,420 メッシュ）を考慮すると、さらに多いと推測される。しかし、その後の調査では全国の繁殖成功率の低下が見られる地域もあり、世代交代を考えると、将来的に個体数の急激な減少が危惧される。

存続を脅かす要因

いままでに営巣木の伐採による巣の消失や送電線による感電例、獣害対策用ネットや養殖池の防除網に絡まるなどの事故の報告が見られた。また、マツ枯れにより営巣可能な樹木が減少したことによる営巣環境の悪化が見られた地域もある。近年は鉛中毒が確認された例や原因不明であるが、産卵しないペアや産卵してもふ化しない事例が見られるようになり、さらに営巣中の餌動物の搬入が少なく育雛に悪影響がみられた例もある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，遷移進行・植生変化/自然遷移，混獲・錯誤捕獲，人工構造物への衝突，不明
	（現在）	森林伐採，農薬汚染/化学物質汚染，感染症/病原菌，遷移進行・植生変化/自然遷移，混獲・錯誤捕獲，その他（餌動物の減少），不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2019：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN

第４次 2018：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2017：	クマタカ	*Nisaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次 2015：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第４次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第３次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第２次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	EN
第１次：	クマタカ	*Spizaetus nipalensis orientalis*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En),【青森県】最重要希少野生生物(A ランク),【岩手県】絶滅危惧Ⅰ類,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【秋田県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【山形県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類,【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク),【群馬県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁・越),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(繁殖期)、絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期),【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類,【山梨県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【長野県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類,【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)(繁殖),絶滅危惧ⅠB 類(EN)(越冬),【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【滋賀県】絶滅危惧種,【京都府】絶滅危惧種,【大阪府】絶滅危惧Ⅰ類(CR＋EN),【兵庫県】A ランク,【奈良県】絶滅危惧種,【和歌山県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【島根県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類,【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山口県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【徳島県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【福岡県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-g),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，鳥獣保護管理法，都道府県条例指定種【長野県・鳥取県】

参考文献

- 樋口広芳（編），2013．日本のタカ学「生態と保全」．東京大学出版会，東京．354pp.
- 井上剛彦，2000．鈴鹿山脈に生息するクマタカの生態に関する知見．第 1 回東南アジア猛禽類シンポジウム大会記録集，滋賀．
- IOC World Bird List version 3. 2. International Ornithologists' Union Updated 16-Oct-2012.

- 石川正道・井上剛彦・私市知子・中川望（編），2000．クマタカ・その保護管理の考え方．クマタカ生態研究グループ，滋賀．62pp.
- 環境庁自然保護局野生生物課，1996．猛禽類保護の進め方－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境庁，東京．87pp.
- 環境省自然環境局野生生物課，2012．猛禽類保護の進め方（改訂版）－特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて－．環境省，86pp.
- クマタカ生態研究グループ，2025．クマタカ生態モノグラフ．平凡社，東京．432pp.
- 森本栄，2006．広島県におけるクマタカの巣の変更と周辺環境．Strix，24: 89-97.
- Naito-Liederbach, A. M., 2024. Genetic diversity assessment and conservation implications for two raptor species（猛禽類 2 種の遺伝的多様性評価と保全上の意義），京都大学博士論文.
- Nechaev, V. A. and T. V. Gamova, 2009. 藤巻裕蔵（訳）．2012. ロシア極東鳥類目録 2. 極東鳥類研究会，美唄市．205pp.
- 日本鳥学会，2012．日本鳥類目録改訂第 7 版．日本鳥学会，三田．438pp.
- 財団法人日本鳥類保護連盟，2004．希少猛禽類調査報告書（クマタカ編）．財団法人日本鳥類保護連盟，東京．364pp.
- 齋藤慶輔，2014．野生の猛禽を診る．北海道新聞社，札幌．254pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nisaetus nipalensis orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nisaetus nipalensis orientalis* is listed as EN under criteria C2a(i).

C. Population size estimated to number fewer than 2,500 mature individuals and:

2. A continuing decline, observed, projected, or inferred, in numbers of mature individuals and:

a. Population structure in the form:

(i) no subpopulation estimated to contain more than 250 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Pesticide/Toxic chemical pollution, Disease, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Bycatch, Other, Unknown
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act. Prefectural Ordinance-Designated Species【Nagano・Tottori】.





執筆者:	井上剛彦（クマタカ生態研究グループ）
Author:	Takehiko Inoue

公表年月：2026 年 3 月